日本の森林の現状と課題

日本の森林に人の手が入らなくなったことで、荒廃が進んでいるといわれている。その現状をもたらした要因は何か。そして、どのような課題に直面しているのだろうか。

宮崎大学農学部教授
藤掛一郎

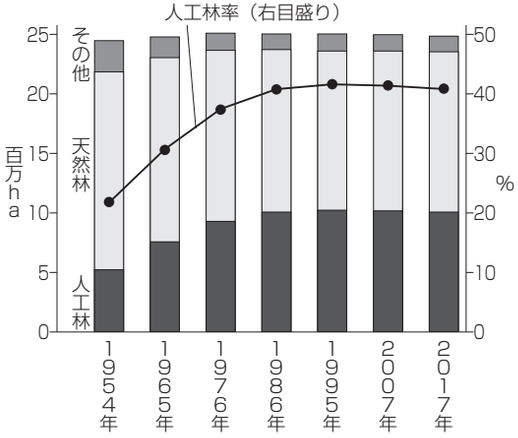
日本の森林の現状

森林の利用は、長い歴史の中ではまず天然林の伐採から始まり、やがて人手をかけて人工林を作り利用するようになると言われる。はじめは豊富な天然林資源から木材を伐って出してくれば事足りるが、木材の利用が進み、人口が増え経済の規模が大きくなるとそれでは間に合わなくなり、利用に適し成長がよい樹種を効率よく育てる人工林が必要となるからである。

この半世紀ほどの日本の林業は、有用な天然林の利用をほぼ終えて、人工林を主体とする林業に大がかりに移行しようとしたところで、つまずき、もがき続けてきた。

図1は日本の森林の林種別面積の戦後の変化を見たものである。全体の森林面積は戦後ほぼ変化がない。しかし、中身が変化した。戦後間もなくには五〇〇万ha しかなかった人工林が一九六〇年代から七〇年代にかけて増え続け、一〇〇〇万haに達し、人工林率は二〇%程度から四〇%程度へと倍増した。

図1●林種別森林面積と人工林率の変化



資料：森林・林業統計要覧各年版

その頃、日本の木材需要は史上最高水準に駆け上がった。**図2**は日本の木材需給について、木材需要を国産材と外材のいずれが賄ったかの推移を見たものである。需要全体としては六〇年代から七〇年代にかけて倍増したことが分かる。これを受けて、木材価格も高騰し、天然林は奥地まで伐り進められた後、将来の木材生産のためにスギ、ヒノキ、カラマツなどの人工林に置き換えられていった。

しかし、成長の早い人工林といえども木材の収穫までには数十年の長い年月がかかる。戦時中から大量の木材伐採を続けてきた日本の森林では、当時の急増する需要を賄うことはできなかった。図から読み取れるように、国産材の供給は停滞し、代わりに木材の供給は外材輸入に大きく依存するようになった。

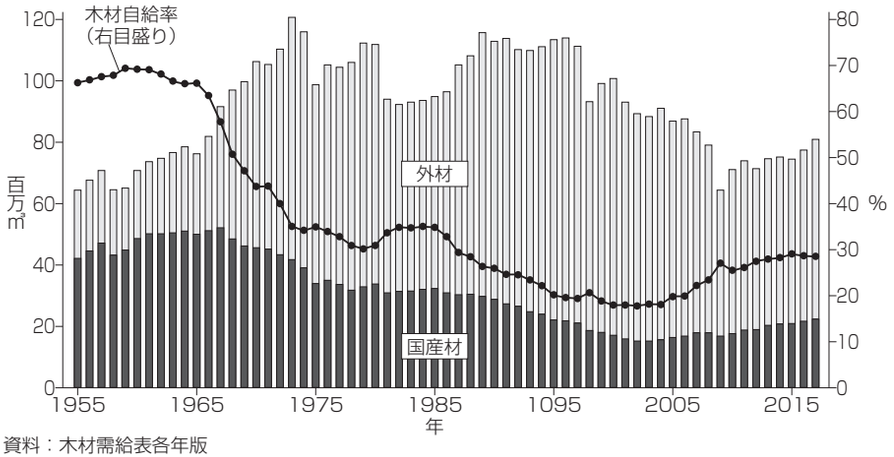
その後円高も進み、安価な外材が大量に出回ると、日本の林業は苦境に立たされた。需要の中身が変化したことも痛手であった。今でも戸建て住宅は多くが木造であるが、昔と違い、柱などの木材が壁の中に隠れる大壁造りばかりとなった。住人の目に触れない壁の中ならば、国産のスギやヒノキにこだわる必要はなくなり、外材でも何でもよいとなってしまったのである。

しかし、二〇〇〇年代の半ばから国産材の供給は上向き始めた。戦後に資源を伐り進めた後に植えた人工林がようやく収穫できるまでに成長したためである。

図3（次頁）は一九七〇年と二〇一七年時点の人工林の齢級（一齢

ふじかけ・いちろう
一九六九年福岡県生まれ。京都大学農学部林学科卒業。同大学助手、宮崎大学助教授などを経て、現職。専門分野は林業経済学。著書に『ミクロデータで見る林業の実像』（日本林業調査会、二〇一七年）など。

図2●国産材外材別の供給量と木材自給率の推移



資料：木材需給表各年版